

家持の「桃李花」の歌

—四一三九・四一四〇雜考—

伊 丹 末 雄

昭和五十七年四月から十月に及んだ新潟県教育委員会による県内上越市今池遺跡——奈良時代半ばから平安時代半ばまでの越後国府の跡らしい。「掘り起こされた古代のくびき」参照——に対する発掘調査中、かなりな規模の古代建築群の遺構に伴う井戸跡——現在のところ発見された井戸は一つで、当然、建物と同時のもの——からモモ（桃）の核が十数箇発見され（金子拓男氏ご教示）、そのうち二箇が今五十八年四月、市立博物館で公開された。

私は期間中の某日、ケースに収められた古代の桃核を凝視しながら、いつのまにか、去る三月に逝去されたばかりの、すぐれた万葉学者、五味智英先生のご生前の温容を想起し、深い感慨にひたらざるをえなかったのである。

今から十年前、前川文夫博士の『日本人と植物』（岩波新書）という啓蒙書が刊行され、中にモモについて興味あふれる考察が記されていた（3 小正月のオツカド棒と桃の信仰）。

現われわれのモモ（桃）と呼ぶ植物は、奈良時代に中国からわが国にもたらされ、急速に広まったケモモ（毛桃）で、それ以前の

モモとは、やがてヤマモモ（楊梅）と呼ばれる全く別な植物であった。そのため、万葉集中によまれているモモは、あるいは従来のヤマモモであり、あるいは新たなケモモなのである、との趣旨で、万葉歌の実例も示され、はなはだ有益なものであった。

こうした新しい研究成果にいち早く反応した万葉学者の一人が五味先生で、それにはまた、充分首肯できる事情も存在していた。

万葉集における代表的な桃の歌といえば、何人も大伴家持の巻十丸巻頭の短歌（四一三九）に指を屈することであろう。

春の苑えん紅あか匂なほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ
これは原文

天平勝宝二年三月一日之暮眺瞩春苑桃李花作二首

春苑紅尔保布桃花下照道尔出立嬌嬌（四一三九）

吾園之李花可庭尔落波太礼能未遺在可母（四一四〇）

という連作の第一首で、続く四一四〇の「李」（スモモ）の歌をめぐる、名高い「家持の李の花の歌」〔文学〕昭和二十五年月号、『万葉集の作家と作品』所収）なる論文を、戦後の新しい万葉集研究の先頭に立って公表されたのが五味先生で、当然、四一三九歌にも言及

されるところがあったのである。

『日本人と植物』の刊行後しばらくして、私は五味先生に一つの仕事を与えられた。家持が越中国守として前記二首をよんだ土地、現在の富山県高岡市伏木までヤマモモは自生しているものだろうか。できたら調べてみてほしい、との依頼を受けたのである。もちろん、この木が高岡市付近に自生する植物であるかどうかは、四一三九歌、ひいては四一四〇の歌をも理解するうえで欠くことのできない資料だからであり、私が比較的近い土地に住む人間だからであったに違いない。

以来、私は北陸の海沿いにヤマモモを追い求めた。

ご存じない方々のためにまず説明しておく、ヤマモモはわが国土から南、台湾にいたるまで山野に、特に海辺を好んで自生する——越中国府も海近くにあったわけで、私が北陸海岸を調べた一因もまた、ここにあった——雌雄別株の常緑樹で、太平洋側では福島県、日本海側では福井県以西にままたま見られ、樹高十数メートルに達する。葉は今いもモモのそれを少し厚くしたようなもので、春四月ごろ、薄紅色で房状三センチほどのきれいな花を雄木がつけ、六・七月ごろ、梅ぐらいの大きさの赤い実が雌木に熟し、食用、薬用に供されてきた。樹皮はまた褐色のための染料となる。こうした理由から、古くは生活上、貴重な資源として栽培されたいらしい。現在も庭木として植えられ、生花の材料とされる。

水上勉氏の小説に描かれたように、福井県も若狭にはヤマモモがかなり自生しているのに、北陸トンネルの東にはきわめて稀とな

り、ときに見かけても、それが自生かどうか、もはや容易に決めがたい。したがって、すくなくとも十年前、私が調査に精出した当時の日本海側におけるヤマモモの自生北限は、おおよそ北陸トンネル付近とすべきであったろう。これは学界の通説とほとんど一致する答えであるが、現実には照らして妥当か否か、不安でならなかった。疲れたてた私は、あるとき前川博士に単的なご教示を乞うてみたのであった。しかし、博士すら実際の北限をご存じないとのこと、なお、あそこそこ歩き続けた。

この植物が庭木として用いられるものでなかったら、調査は比較的容易であるのに、せっかくヤマモモを見つけて持ち主に尋ねても、「物心ついたときには生えていた木で……」といった調子の返答に悩まされてしまうわけである。ただ生えているヤマモモなら、現に私の居住する上越市内にも、かなり大きな木が見えるし、上京すると着く上野駅の公園口から道路を一本越したところ——国際文化会館裏に八株ほど植え込まれ、成長している。そうした、割合ありふれた樹木を、ただ自生北限をつきとめたいばかりに追求する単調な仕事は、ときに、ばからしくも思われてならなかった。

そうこうするうち、西條伸一郎氏から、すばらしい助言をいただくことができた。漢方薬の製造をもって知られる富山市の広貫堂に質してみたなら、というのである。

さっそく勇を鼓して広貫堂の半田和敬博士にうかがってみたところ、たちまち、ていねいな指導に接した。広貫堂では現にヤマモモの果実を製薬上の原料として使用し、購入先は、なんと九州・四国・和歌山県を主としながらも、新潟県、さらには北海道にまで及ぶ、とのことであった。

これで、ヤマモモの自生分布が全国にわたることが明白となり、たとえ現在、高岡市付近に自生のヤマモモを目撃できなくとも、樹木の伐採がほとんど行われなかった奈良時代、ヤマモモがある程度の数、生えていたであろうと推定されるにいたった。さらに、ヤマモモははなはだ有用な植物だったのだから、方々に植え育てられていたはずで、越中国府に栽培されなかつたとするなら、むしろ、ふしぎでさえある。現に家持は国守館庭園のタチバナを詠じているほどである（巻十九・四二〇七）。

実は私には半田博士のありがたいご教示を心から納得できる素地があった。つまり、ときどきヤマモモを求めに立ち寄る市内I生花店の人々が語るには、「うちで売ってるヤマモモは、長野市の奥から長野の市場に出たものを買ってくるんです。」ということであったが、長野市は高岡市と緯度の似た町で、海拔を異にする内陸的な土地である。その奥地の冷涼さについて別に説明を要すまい。そうした高原地帯におお商品となるだけのヤマモモが自生するとなれば、当然、高岡市にも富山県全体にも自生してしかるべきで、気温の面だけからするなら、さらに、はるか北方にまで生えてさしつかえないはずだと考えさせられていたからである。

この半田博士のご指導を基礎として、私は五味先生への報告書のつもりで一文を草し、発表させていただいた。「紅匂ふ桃の花——家持の四一三九歌の背景」〔美夫君志〕昭和五十三年三月・第二十二号）がそれである。

右小文を記すにあたり、モモに関する文献も一瞥したつもりであるが、私の知る限り、モモ交替の事実を指摘したのは故牧野富太郎博士（『新日本植物図鑑』）で、これを承けて前川博士が研究を進め

られている。博士の論述からすれば、八世紀半ばから末のころ、それまでモモと呼ばれてきた自生のモモ、すなわちヤマモモの中に、中国伝来のモモ、ケモモが入り込み始めていた。植物学者以外の人もこの問題に触れていて、たとえば斎藤正二氏も「モモと文学」〔花材別いけばな芸術全集・4〕で同じように理解していられた。前川説によられたのであろう。家持の四一三九歌は「天平勝宝二年」の作ゆえ、あたかも七五〇年に相当し、文字どおりモモ交替の現象のただ中でよまれていることとなる。（『本草和名』『和名類聚鈔』『枕冊子』等はずでにヤマモモを「楊梅」と把握。）

さらに、『万葉集大成8 民俗篇』に収められた小清水卓二氏の「万葉集の植物——中」中の、「もも・けもも（桃・毛桃）」の項もまた、伝来したケモモがいかなるものだったのか、を知るうえで見のがせない。「万葉集には、ももとけももとが詠じてある。けももは果実の表面に毛のある意味を示すが、単にももととしたものは、けももをももととしたか、それとも毛のないけもも（椿桃）を意味したかが問題である。然し茲ではけももを広義のももと詠じたものとして、ももの種類を調べて見ると、何れもノモモである。この類は現代でも山間地に半野生的に生えてゐる地方もある。果実は小さくて毛がある。花は桃色で美しい。」と説明されているのである。

私の上記論文に書き洩らしてしまったが、戦後、越中国府跡とみなされている伏木の勝興寺周辺に、この「半野生的に生えてゐる」相当数のノモモを目撃したものであった。

なお、冒頭に記した上越市今池遺跡出土のモモもまた、核がやや小ぶりであるところから、これまたノモモであろうと推定したい。もし四一三九歌が属目の作であるならば、家持の「眺矚」した

「桃」も同じようにノモモであったことであろう。

万葉集に登場する九箇所、十回に及ぶモモ（歌では七回）を表示すれば、次のとおりとなる。

- (1) 卷七・一三五六 寄木 作者不詳 ヤマモモ（原字「桃」）
- (2) 同・一三五八 同 ケモモ（「毛桃」）
- (3) 卷十・一八八九 譬喻歌 同 ケモモ（「毛桃」）
- (4) 卷十一・二八三四 寄菓諭思 同 ケモモ（「毛桃」）
- (5) 卷十二・二九七〇 寄物陳思 同 ヤマモモ（「桃」）
- (6) 卷十七・三九六七 大伴池主 ケモモ（「桃」）
- (7) 同・文 大伴池主 ケモモ（「桃」）
- (8) 卷十九・四一三九（題詞とも） 大伴家持
- (9) 同・四一九二 大伴家持 ケモモ（「桃」）

これらのうち、ケモモかどうか明らかでない「桃」が、大伴家持自身と、彼に贈られた池主の作品中に限られるのが注目しう。それ以外は、単に「桃」と書かれたものがすべてヤマモモで、ケモモの場合、「毛桃」と明記されていることとなる。

一三五六と二九七〇の「桃」がヤマモモであること、疑問の余地もない。

向つ峯むかひのねに立てる桃の木成らめやと人そささめく汝なが心ゆめこころ（卷七・一三五六）

谷を隔てた「峯」に生えているの見えるほどの大木なのだから、それだけですでに樹高数メートルのケモモより、十数メートルにも達するヤマモモであるまいかと予想できるが、前川博士の次のご説明を読めば、さらによく納得しうる。「ヤマモモは雌雄異株だ

から、向うの峯に大きな木があっても雄株であれば一向に実はない。雄とは知らなかったはずである。しかし実のならぬことは皆の承知するところであり、だからこそ、このおれとお前の仲はみものらぬことあの山のヤマモモと同じだとうわさする奴等がいるらしいが云々となつてびつたりするのである。」（『日本人と植物』）。

次の歌は染色に触れながら、よまれた。

桃花もも裾すその浅あはら衣え浅あはらかに思おもひて妹いもうとに逢あはむものかも

（卷十・二二九七〇）

ヤマモモの樹皮が褐色の染料として使用されたためであると、「桃花もも裾すそ」——「桃花」はツキとも訓まれる——という原字から知れる。そうして、この用字から、モモ即ヤマモモという觀念の深さが窺われるとともに、「花」字まで使われているところから、上代人がヤマモモの花をきれいな花と見たことまでわかる。実際きれいで、今も花材として用いられているのである。

残りのモモはすべて「桃」と書かれ、前記のとおり家持と池主の作品中に姿を現わす。

私が前稿において家持・池主関係の「桃」を、すくなくとも四一三九歌の「桃」を、ケモモが「天平勝宝二年」に越中国府にまで及んでいた証拠がなく、一方ヤマモモならば自生もしていたはずであるのみならず、庭木として生活用木として「春苑」に生えていて、ふしぎないところから、どちらかといえばヤマモモであったろう、と推定したのは、越後国府跡（？）発掘前の措置であるうえ、家持・池主関係以外の「桃」がみなヤマモモである点を重視しすぎたためであった。

失敗に気づいたのは、北陸におけるヤマモモの花季を調べてみてのことである。従来、太平洋側のヤマモモの花ばかり眺めてきた私は、なんとなく四月後半に花をつける木と思ひ込んでしまっていた（今春も上野公園のヤマモモは四月末に開花したそうで、私が五月二十二日に観察したとき、実は大豆大となっていた）。

しかるに、本稿に着手しようとして、五月三日の夕暮、居住地、上越市で見つけておいたヤマモモを観察したところ、ただ二株で雌雄をまだ知らない木ながら、ようやく芽が出たばかりで、とにかく花季はこれからであるのを確認した。

ほど近いI生花店の主人に尋ねてみても、「長野からくるヤマモモの花もまだ咲いていません。」との返事である。

してみると、大伴家持が三一九歌をよんだ「天平勝宝二年三月一日」が陽歴四月十五日に相当する（『三正綜覧』）ところから、いかに伏木の国府跡が局部的に温暖な土地であろうとも、ヤマモモの花が咲いたものかどうか、疑わしい。苦しまぎれに、必ずしも花がなくてもよい。モモと呼ばれてきた木が作者の眼前に立っていさえすれば、それに触発されて歌がよまれるのではないか、とも思案してみたけれども、やはり、むりが残る。

他方、ケモモの北陸における開花期はどうか。これはすでに五味先生が上記論文に統計結果を提示されたごとく、「三月一日」、つまり陽歴四月十五日に合致する。私は越中に隣の新潟県の江戸時代以来のモモの産地（白根市）に生まれ育ったため、越後での花季を承知しているが、越中をそれより、かすかに早いものとみなして、「三月一日」の妥当性を認めうるわけである。また年来、高岡市付近を調査してきたので、多少の資料も保有している。

「天平勝宝二年」に越中国府にケモモが育ったものならば、「三月一日」にはおそらく花を咲かせていたことであろう。

むしろ、続く四一四〇の歌に「李」がよまれていて、読み方によっては「李の花」が「庭に落る」ともなるのが気にかかる問題である。スモモの花はモモのそれより心持ち遅く咲くのが常であってみれば——私の生家に桃畑があり、李も混在していたので記憶する——「三月一日之暮」にすでに散りつつあったこととなるのが不審なわけである。この件について五味先生は、「四一四〇の李の花は、実景としては散って居たとは思われない。（同じ伏木でも場所により開花日等も異なる筈ゆえ、精しくは国守の館あたりのようすを調べる必要があるわけであるが、四一三九との関連に於て当年当日の李の花は散っていないと結論していいであろう。）そうすると家持は、枝に在る李の花を見てよんだのであり、地に散りしいた花を見て居るのではない。こゝにも二句切説を支える一つの柱があるわけである。」と論じられた。まことに、そのとおりだと思ふ。

三句切れの歌とすれば、どうしても「李の花」が「落^チ」ことなっていてしまい、矛盾をきたす。もし属目の歌でない場合でも、花季に對して、でたらめなよみ方までしていまいから——家持・池主の記録がほぼ合致している点から推しても、彼等が花季を無視していないことがわかる——「三月一日」に「李の花」を「落^チ」らせてしまはずがないのである。

家持や池主のような中国文化に憧憬した文人達の採りあげるモモは、なんとしても、かの国の典籍に頻出する「桃」でなければなる

まい。事実、彼等二人に限れば「桃」字しか使用していないのである。おそらく両者共に都にあって日、すでに中国伝来の魅惑的な桃花を目のあたり觀賞した経験をもっていた。少年のころ学んだ『詩經』(周南)に「桃之夭々」とあり、その「桃」はまた、しばしば「桃李」という熟語となって使用される。『詩經』(召南)にもはや「華如桃李」と見え、それを承けて『玉台新詠集』(卷二)に「采華若桃李」と用いられている。他に『札記』『史記』それから曹植・阮籍・陶淵明・陳叔宝等の詩と、まことにあげきれないありさまで、隋時代には例の「桃李章」の歌が大いに流行し、唐になると、都の繁栄が「洛陽城東桃李花」(劉廷芝「代悲白頭翁」)とか「滿城桃李屬春官」(劉禹錫「寄王侍郎放榜詩」)とかと詠じられる始末である。万葉人の脳裡に「桃李」という漢語の刻み込まれない道理がない。

それにしても、「李」スモモの伝来は、ともすると「桃」ケモモより速かったかもしれない。小清水卓二氏の上記論文「すもも(李)」の項には、「スモモは、中国産のイバラ科の落葉小喬木で、古くから渡米して来た事は、大和地方の古代人の住居址から屢々この核が出土するのを見てもわかる。スモモの名は、その果実が桃に似て而も酸味を有するためにつけられた名である。漢名は李である。」と記す。なお、割合、雪国に負けずに育つ植物であることをつけ加えておきたい。

そうしたスモモが、大伴家持によって万葉集中ただ一回、四一四〇歌としてよみ伝えられているのがおもしろい。彼の文芸史上の功績は一二にとどまらないはずであるが、一人「李」を歌材とした、

というような小さな事跡もまた、必ずしも逸するわけにいかないものであろう。

大伴家持と池主との間に「李」ないし「桃李」が問題とされるにいたったのは、卷十七・三九六七歌の序——実は天平十九年「姑洗二日據大伴宿祢池主」の家持に宛てた書翰以来で、その中に「紅桃灼々戲蝶回花舞」と記され、「姑洗」とは三月の称であるから、事実、越中国府に三月二日、桃の花が咲いていたかどうかが気になるところである。

しかるに、「三月四日」、池主が「七言晚春三日遊覽一首并序」中で「桃花照_レ映_レ以_レ分_レ紅」と使用しているところを思案するに、どうやら実際にモモ、それもケモモの花がひらいていたのであつたらう。(ヤマモモの花はこれほど「紅」くない。これまた四一三九歌の「桃」を私がケモモとする大きな理由の一つである。)

そうとすると、「天平勝宝二年三月一日之暮」に「紅匂ふ桃の花」となつても支障なく、そこからさらに「わが園の李の花か」とよまれて、かまわないことになっていく。

「三月一日」に制作される詩歌がまず「桃李」にかかわる中国の風潮を、家持等はつとに学んでいた。したがって、いよいよとなれば、実際に「桃李花」が咲いていなくとも、空想をもって創作にあられたかもしれない。それは確かにそうであらう。しかし、私はやはり家持の眼前に「桃李」が存在したのだと判断する。作者が、「家持は、想像力に乏しく、事物に即しての発想にその特性があった。かれが、作歌によるこびを深くし、それを生きるうへの慰藉としたのも、かかつてその点にあったと思われる。」と北山茂夫氏

〔『大伴家持』〕の評されたとおりの人物だからである。

さらに、越後国府跡らしい上越市今池遺跡——上越市立博物館の考古特別展シリーズⅠ資料「掘り起こされた古代のくびき」にも「かつて大礎石が発見された本長者原齋寺に近接する今池遺跡では、調査区全域に大規模な掘立柱が検出され、国の役所ではないかと推定されています。」と記されている——出土の桃核を思い合わせる要もある。古代建物群はまづ井戸が掘られ、水を得られることが確認されたうえで造られていったわけであるが、その井戸の「最下層から」(掘り起こされた古代のくびき)出土した桃の核の年代は、おそらく予想外に古いものであるに違いない。

こうして、多年迷いに迷ったあげく、私もまたついに四一三九・四一四〇両歌、広く言えば家持・池主の「桃」「桃李」を虚構の文芸とみなさず、属目の歌と享受するにいたった。ひどい回り道をしたものであるが、ものごとをうのみにしかねる性分であるからには、また止むをえない。

四一三九歌の題詞中の「春苑」は、「三月一日之暮」と明記された以上、国守館の庭園と解してよからう。国守が「暮」まで国庁で執務したと思えないし、「出で立つをとめ」などという語句も国庁より官舎にふさわしい。古く中国には門の両側に「桃李」を植える慣習があったらしいし、陶淵明も「桃李羅堂前」と詠じたが、越中国守館の「春苑」には、このとき、おそらく一・二株ずつの「桃李」が花を咲かせていたのであたらう。そうして、「下照る道に出で立つをとめ」から推せば、それらの樹高はどうやら人の背丈を上回っていた。とは言っても、「桃栗三年」の諺どおり、「桃李」の

核が都からか運ばれて越中国府にあざやかな花をつけ、心ある人士をして「眺臨」させるまで、さほどの年月を要さなかったはずなのである(実際には小さな木だったかもしれない)。

さきほどから吟味している「紅匂ふ桃の花下照る道に」とする二三四句が卷十八・四〇五九、河内女王の短歌の「橘の下照る庭に」を学んでいること確かであろう。女王の歌は「天平二十年春三月廿三日左大臣橘家之使者」として越中国府に家持を訪れた田辺福麿により、もたらされた、「太上皇御在於難波宮之時歌七首」(四〇五六〜四〇六二)中のものであるゆえ、元正太上天皇と緊密な橘諸兄に連なる家持としては、ことさらに親しみを覚え、そうした自らの心情を表わすためにも公然と撰取したのであった。

次に、四一三九歌の末尾二文字「媿嬌」をヲトメと訓ずべきは、卷一・四〇を初めとして九回の例がいずれもヲトメと訓むほかなく、家持においても「詠霍公鳥并藤花一首并短歌」の長歌(卷十九・四一九二)に「媿嬌良我ヲトメ手取ヲトメ持ヲトメ有」という語句があり、前後からして「媿嬌」をヲトメとせざるをえないところから類推できるわけであるが、古の歌語においてツマ(集中、一字の場合こう訓まれている)またイモと訓むのが妥当な熟語である。契沖が『万葉代匠記』にイモとしたのも、むりない。なぜならば、「媿」は「つま(媿人)」で、「需は、柔らかい意を含む。媿は『女十音符需』の会意兼形声文字で、柔らかいからだつきの女性。」とされる藤堂明保博士編『学研・漢和大辞典』の説明どおりで、『説文解字』にも「媿、弱也、从女需声」と見える。したがって、ツマ(『広雅』

妻謂之嬬」)ともソバメ(『説文』「嬬、一曰、下妻也」)とも解されるわけである。イモとしてよい。

その上に位置する「嬬」字は、万葉集以外に用例なく、したがって、古来、学者が避けて通りたがる文字ながら、「感」とは「強く心にこたえる」(『学研・漢和大典』)ことで、それに女偏を加えてつくったものゆえ、心を動かすに足る、美しく、いじらしい女性を表現している。この、「嬬」ツマをラトメに宛てるといふ、ややふしぎな用字は、巻一・四〇歌に用いられたのを初めとして、人麿(巻一・四〇)、人麿歌集所出かと思われるもの(巻六・一〇五六、巻十・一八七九、同一九四二、同一二一七、巻十二・二九九〇)、藤原麿(巻四・五二二)、若宮年魚麿の誦した歌(巻八・一四二九)、それから家持(巻十九・四一三九・四二二一)に使われている事実を徴して、人麿系統と家持にかかわり深い独特な文字であることが察せられ——麿の妻だったのが家持の叔母であり姑でもある坂上郎女であり、若宮年魚麿は伝不詳ながら自作(巻三・二八七)をとどめるのみで、四首の歌を誦し大伴家に伝えた、大伴家に連なる人物——家持の「山柿」を学んだ痕跡を見る思いがする。さらにまた、逆に考えれば、人麿系統の歌が家持か彼に連なる人物によって書かれていること、ともすると、作られているであろうことを示すわけで、私は若いころ「柿本朝臣人麿歌集」を家持の擬作と推定したりした(小著『万葉集の成立』)。今、極端な論を慎しむとしても、人麿系統と家持のつながりとは、万葉集に広く見られる家持とその側近(書記等)の用字上の爪跡とは、承認されてしかるべきものであろう。

ともあれ、美しく、かわゆいイモとなるはずの「嬬」を、この四一三九歌のみならず四一四〇歌にもまた用いている事実から、家

持が二文字でラトメ三音を表記しながらも、なお自分の意のままになる女であることを匂わせたのでないか、と考えられないでもない。本人使用の文字が伝わったものと推定されるため一言してみるのである。それが妻であったか、はたまた他の女であったか。故窪田空穂氏が「妻の大嬢に對しての一種の愛称」(『窪田空穂全集』)と解されたのはいかがであらう。

「嬬」を、具体的には三年余の別居生活——当然な事態なのであるが——を経て越中に下向、夫と同居していた家持の妻、坂上大嬢を表現したもの、とする見解が従来しばしば発表されてきた。大嬢は四一三九・四一四〇両歌のよまれたとき確かに越中に来ていた。それは四一三八の歌によってわかる。しかし、前年初冬(?)に下向した妻をいとおしんで「三月一日」の作に「嬬」と表現したものでどうか、疑問がないわけではない。すでに人妻なのに、なお「大嬢」と呼ばれる妻をいとおしく思う心で「嬬」としられたのであつたらうか。いや、第一に、これもまた中国文化への憧憬が誘ったところの、故意のしわざとみなすべきではないか。つまり、春苑娘子といった語句の、一種の翻訳的作品と理解したらどうであらう。

私が見るところ、漢語だらけの題詞にふさわしく、四一三九歌全体がさながら中国趣味の凝結である。初句「春の苑」がすでに題詞の用語「春苑」を国語に言いなおしたものにすぎず、その「春苑」は春苑桃李園といった画題を生むことにはかならない。それゆえ、一首全体が樹下美人図あたりを想わせる作品となってしまうのも自然な帰結であらう。(斎藤茂吉博士『万葉秀歌』参照)。

巻十七・三九六五歌の詞書——実質は地主に宛てた家持の書翰——を見るに、「春朝春花流・覆於春苑」という語句があり、家持が「春

苑」なる漢語を好んで用いた人物であることを知るけれども、そうした熟知の語を翻訳して用いたのが「春の苑」で、小島憲之博士がご指摘のとおりであろう（『上代日本文学と中国文学・中』）。

家持達の中国憧憬は実にそこまで徹底したもので、たとえば彼の後年の短歌、巻二十・四三九七の題詞に、

在「館門」見江南美女「作歌一首

とある。その「館門」とは、兵部省の難波出張所の門で、作者は「兵部少輔」（四三九七左注）として、ここに勤務していた。したがって、「江南とは難波のある堀江の南をいうのであるが、ただそれだけではなく、実に家持は中国の江南地方の美人を聯想してゐたものと思はれる（文選曹子建雜詩六首『南国有佳人、容華若桃李』李善注『南国謂江南也』とみえ、この詩は玉台新詠にもみえる）」と小島博士が同じ著書で説明されたとおりである。してみると、家持はやはり「容華若桃李」との詩句を記憶していたはずで、それがまた四一三九・四一四〇兩歌をはぐくむ土壌ともなっているわけである。つまり、二首自身、「佳人」を表現することともなりかねないのである。

四一四〇の歌にしても、決して前歌におくれをとらない中国趣味から生まれ、直接には家持以上に中国文化に心酔した父、旅人の巻五・八二二歌を意識しての作であるように思われる（土屋文明氏『万葉集私注』参照）。

ところで、四一四〇歌が、歌として高い評価を受けることなく今日に至った原因の一つに、二句切れの歌なのか三句切れなのか明らか

かでなく、そのため十分に鑑賞できかねた憾みがあったのは否めまい。五味先生の上記論文もまた、この問題の解明に努めた、すぐれた業績ながら、なお必ずしも決定的な成果を収めずに終わった実状は、たとえば故澤瀉久孝博士が何等、五味説に言及されることなく『万葉集注釈』に三句切れの短歌として処理されたこと一つからでも推測できるはずである。

だがしかし、四一四〇の歌は、なんとしても二句切れとみなすべきであろう。「わが園の李の花か」で区切らず、「庭に落る」まで続けてしまうと、スモモの花季に合わなくなってしまうこと前述のとおりであるが、そのほかに、一続きの中に「園」と「庭」とが同居することとなるわけで、短い詩型中、こうした拙劣とも批評するほかない、ことばの使い方を行うものかどうか。五味論文によれば、「庭」は地面でなく庭園であるそうで、いよいよもって不可解となってしまう。

末尾の助詞「か」「かも」に注目して一首の構成を眺めるに、

わが園の李の花か。庭に落るはだれのいまだのこりたるかも。となり、第二句の「か」が詠嘆の助詞、結句の「かも」が疑問の助詞というふうにつくられていゝ短歌なのであるまいか。つまり、わが園の李の花が咲いたよ。まるで庭に降る淡雪のまだ樹上に消え残っているかのように見えてならない。というほどの内容の一首となるはずで、けっこう味わうに足る作品と考えられる。

このように論ずる私の脳裡に浮かんでいる「桃李花」の一場景がある。それは二十年春、もはや敗戦近い祖国の悲惨をしばし忘れさせてくれた、富山市石金付近のながしかの畑で、眼前いっぱい「桃李」が混然と咲き乱れ、ことに「李」の花の純白は切なくなるほ

どで、それは真実、新雪を想わせるものであった。「庭にふるはだれのいまだのこりたるかも」とは、雪国に三冬過ごした家持の体験から発した、いかにも自然な連想なのだ。

ハダレの原義は、もしかしたら「葉垂れ」でなからうか。木々の葉が垂れさがるほどに、うっすらと降った雪、淡雪を視覚的に表現したことばだったのであるまいか（ホドロはハダレの同行転音したものにほかなるまい）。

四一三九の歌は、落日に映発された桃花の豊艶な美を「媼婦」のバックに活用し、四一四〇になると、僅かに時が推移して、薄暗くなってきた「春苑」に白く夢のように浮いて咲く李花を淡雪と対比させたのである。二首共に絵画的でありながら、前歌には「媼婦」が配されて完成し、四一四〇においては、あまりに静的におちいりがちなので、「庭に落る」による動をもつて一首の平板を救ったわけである。家持作として、けだし上々のできばえではないか。

さきほどから「落」字をフルと訓んだりチルとしたりしているのは、万葉集中この文字が雪に関してはフルと使われ、花についてはチルと用いられている事実に基づく操作にほかならず、五味論文の詳しく教えてくれたところである。

かつて大伴旅人が太宰帥であった当時、彼を中心とし、山上憶良を一翼とする、太宰府歌壇とでも呼ぶべき歌人群が見られた。その傍らで育った家持にとって、越中における生活のさびしさをまぎらわせてくれた下僚にして歌友たる大伴池主（前任掾）それからまた久米広縄（後任掾）等の存在が、いかにありがたいものであった

か、容易に察しうる。特に池主は同族の年長者で、心を開いて交わるに支障なく、漢学の素養においては、おそらく家持を上回っていた。

こうした文芸上の友を得て展開された家持の生活をほんの少し垣間見ても、問題の「天平勝宝二年三月一日」の「桃李花」の歌と「四月三日」の「霍公鳥」の歌（卷十九・四一七七）との間に「三日守大伴宿祿家持之館宴歌三首」（四一五一～四一五三）が記され、三月三日上巳の日に宴したことがわかる。四一六二の「予作七夕歌一首」はもちろんとして、四一七二の題詞にはまた「二十四日立夏四月節也。因此二十三日之暮忽思霍公鳥啼喧声作歌二首」と記されるのを読めば、宛然、中国文人の生活ではないか。「三月一日」に「春苑」を「眺矚」して時節の「桃李花」をよむことなど、家持において至極当然なのであった。

しかも、この卷十九の巻頭だけからも、父の下僚であり、一種の雅友でもあった山上憶良への私淑ぶりが明瞭で、「山柎之門」（卷十七・三九六九序、家持）・「山柎歌泉」（同・三九七三序、池主）解明のための一資料たるを失わない。四一五八左注の「出拳」の語には「貧窮問答歌」等に対する意識が感ぜられ、四一六五左注には「右二首追和山上憶良臣作歌」と明記されている。「山上憶良臣」がすでに彼に対してのみ行われた特別な尊敬の扱いであること周知のとおりである。

憶良を尊ぶ心は、やがてまた父を思う情であり、ありし日の彼等を偲べば、いきおい朝夕親しんで天平二十年、越前へ遷任して行った、なつかしい大伴池主——家持を中心とした越中国府における万葉集編纂作業が終わったゆえの措置であったと思われる。万葉集全休（十七巻）

もまた、このころ一応編まれたのであったらう——への「感旧之意」もまた「不勝」(四一七七題詞)ものとなっていく。

こうした雰囲気の中で四二一九・四一四〇両歌も創作されているわけで、さしあたり池主、それから広繩等を念頭に置いて家持はよんでいるであらう。

よく知られる「幼年未達山柿之門。裁歌之趣詞失平聚林。矣」とは、歌語を「類聚歌林」に照らして学ぶことをしなかった、というほどの意味を宿しているように考えられるし、「山柿歌泉比此如蔑」の「山柿歌泉」には、「山柿」を中心とする和歌の宝庫——編まれて万葉集となっていく資料——が寓されているのではないかと推測されるふしがある。これらの書翰の交わされた天平十九年こそ、大伴家持を実務代表者とする万葉集(十七卷本)の編纂事業が奈良で、そしてまた越中国府でさかんに進められていたろう時期で(小著『万葉集成立考』)、家持が都から運ばれた、比較的まとまった資料を用いて、越中でも編める巻々をつくった作業を、当然、池主達も手伝ったものと推測されるわけであるが、そうした関係が書翰に投影したのである。

私は万葉集の編纂事業が「天平十八年正月」(卷十七・三九二二題詞)に始まったものと推定するが(上記小著)、吉井巖氏の説かれたごとく、「家持は越中守赴任以前には著名歌人からの影響をほとんど見ないといってもよいのであるが(伊丹注、これが「幼年未達山柿之門」である)、赴任後の作には(中略)憶良からの主題詞句の影響は著しい」(「越中守家持の作品をめぐる」)〔万葉〕昭和三十年四月・第十五号)のも、万葉集編纂のための作業を手づから

進めたための変化と解したい。北山茂夫氏の、「山柿の門」の再発見も、ある意味では、この作業(伊丹注、万葉集編纂作業のこと)にかかわる点があるとおもう。(上記著書)との解釈には、深い共感をそそられる。

万葉集編纂を命じた元正太上天皇が天平二十年四月に崩じ、未成のまま、たてまつるべき対象を失ってしまった実務代表者、大伴家持の失望はここにきわまる。しかし、やがて何に希望を見いだしてか、作歌に精進し始めたときの佳作、それが「天平勝宝二年三月一日之暮」の「桃李花」の歌二首だったわけで、彼と不可分の万葉集とのかかわりから展望するならば、さだめし、そうした地点に四二一九・四一四〇両歌は位置を占めるべきはずなのである。

本稿中、すくなくとも前半、モモに関する部分は、五味先生世におわさば、足下に呈すべき最終報告であるのに、すでに幽明境を異にし、なすすべを知らない。擱筆にあたり、合掌してみ霊の平安を念じたてまつる。

(一九八三・六・六、青い実をつけたヤマモモの一枝を挿して)